熊本市田原坂西南戦争資料館 ミニ展示

二枚の絵馬　描かれた西南戦争

―絵馬にみる戦争体験と祈り―

大牟田市 湯谷天満宮の絵馬と和水町 長小田住吉神社の絵馬 ―

二枚の絵馬には、戦場を直に体験した人の「目」を通した表現が見られる。
そこからは、西南戦争の現実を読み解くことができる。

2022

熊本市田原坂西南戦争資料館

熊本市田原坂西南戦争資料館 ミニ展示

二枚の絵馬　描かれた西南戦争 ―絵馬にみる戦争体験と祈り―

西南戦争の場面を描いた絵馬は、主戦場となった熊本県内だけでなく全国各地にある。
戦争に関わった人々が、戦後、それぞれの思いを込めて地元の神社に奉納したものであろう。

今回、取り上げるのは二枚の絵馬。
通常の絵馬とは異なり、ともに、その場にいなければ描き得ない描写が見られる。戦場を直に体験した人が、その様子を絵師に伝え描かせたと考えられる。

西南戦争を描いた当時の絵は膨大な数があるが、その殆どは錦絵や絵草子など、現地を見ていない東京や大阪の絵師たちが報道や伝聞をもとに想像で描いたものである。

現地を見、体験した人の絵としては、政府軍第一旅団の会計部長 川口武定が著した『従征日記』の川口自らが描いた優れた写生画、地元の絵師が描いた「焼出舎」の錦絵などが知られているが、その数は限られる。

体験にもとづいて描かれた二枚の絵馬。
歴史資料としても価値が高く、私たちは、そこから西南戦争を追体験することができるのだ。

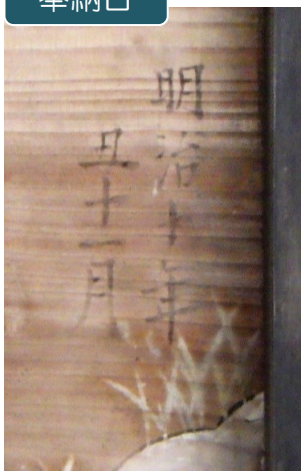
その１　大牟田市 湯谷天満宮の絵馬

横91.0cm×縦61.5cm

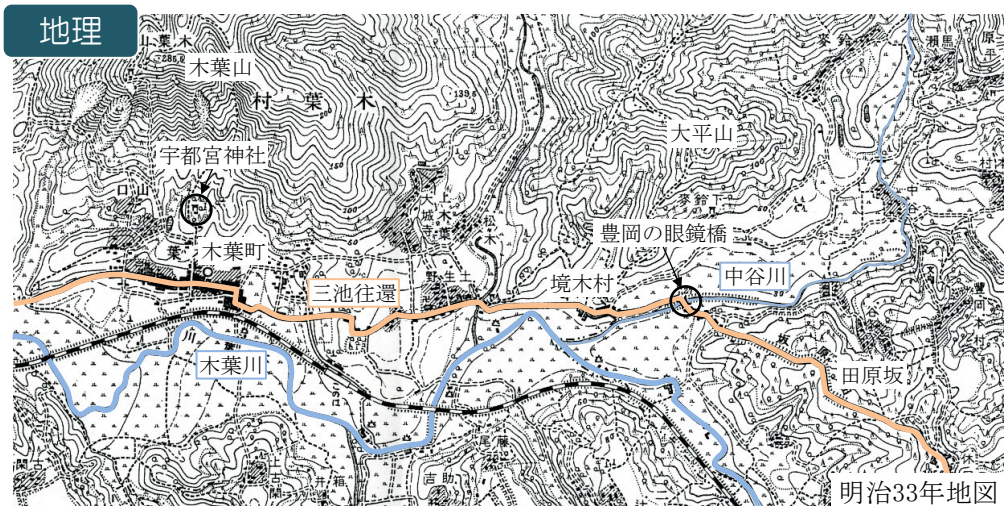
福岡県大牟田市四ケの湯谷天満宮。豊前街道沿いにあり、熊本県境に近く、政府軍大本営が置かれた南関町正勝寺からは約3.5kmの距離にある。

この絵馬は、田原坂の戦いの医療に関わったこの地域の人が奉納したものと考えられる。

奉納日

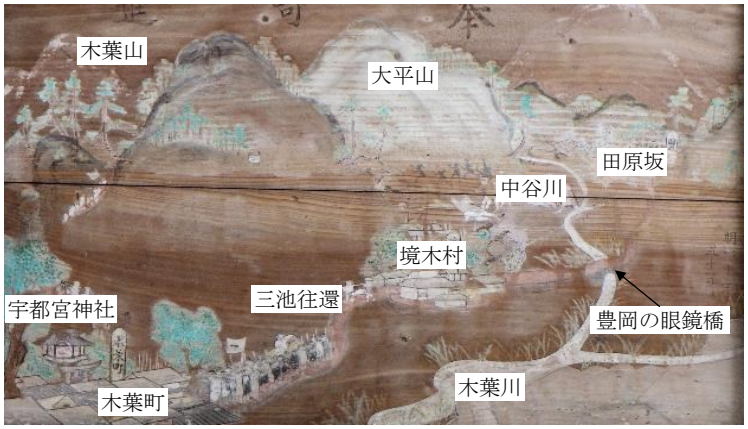


地理



明治33年地図

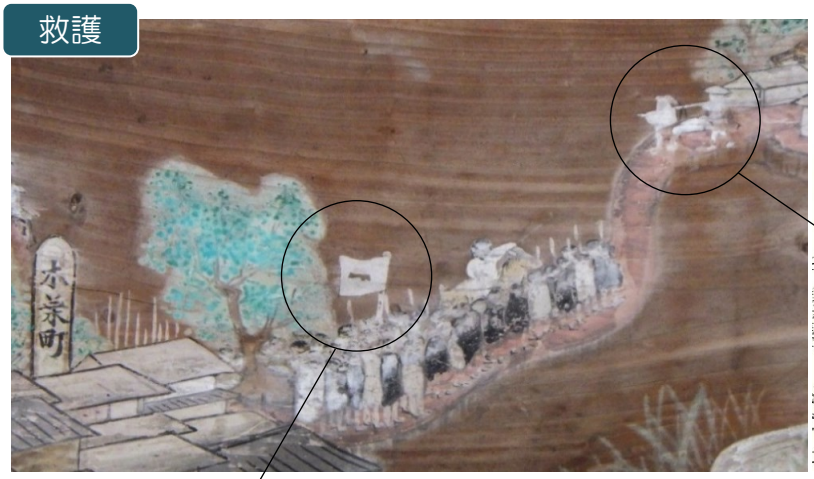
奉納日は「明治十年丑十一月」。
西南戦争終結から間もない頃である。



道・川のラインや丘陵の形ほか、民家・神社・橋などの位置関係が概ね忠実に描かれている。

南西側のやや高所から見た景色であり、現地の地理を知らなければ描き得ないものといえる。

救護



川口武定1878『従征日記』

陸軍軍医学校1936
『陸軍軍医学校五十年史』

この絵馬の主題ともいえる描写。
田原坂の戦いの負傷者を板に乗せて運び、これを陸軍の軍医寮旗を掲げた一団が木葉町で出迎えている。

木葉町の正念寺・徳成寺には3月3日～4月23日、政府軍包繃所（臨時病院）が設けられ、地元の医師も協力して献身的に治療に当たった。後には日本赤十字社の前身となる博愛社の救護活動が開始された、日赤発祥の地でもある。

右上は現場を見た川口武定の写生画「高瀬ノ死傷者ヲ南関へ送ル図」。負傷者を戸板やモッコで担いで運んでいる。

左下は当時の看護兵と軍医寮旗。「赤一字」の旗は初代軍医総監 松本 順の考案で、これに縦棒を加えれば「赤十字」になる。

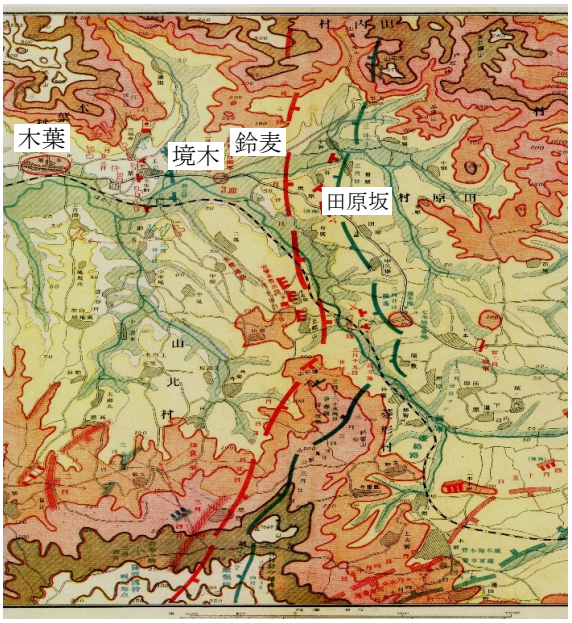
戦闘

右上には、3月3日～20日の田原坂の戦いが描かれる。

田原坂に布陣する薩摩軍の手前には、政府軍が放った大砲が着弾・破裂し、その左側には兵士の人影が刀を振り上げて戦っている。

一方、境木付近からは政府軍が3基の大砲をもって砲撃し、その向こうの鈴麦付近では多くの人が逃げ惑っている。

※ 政府軍の砲撃は3月5日には開始された。
「砲兵右分隊ハ本道(三池往還)ニ…出テ賊堡ヲ轟撃ス…砲撃極メテ猛烈ニシテ死傷多シ」『征西戦記稿』



身近で戦闘があった木葉猿窯では、大砲の芥子面（泥面子）が作られた。

写真はJR熊本駅周辺の遺跡出土。

督戦地

督戦地の政府軍旗。

有栖川宮総督もこの地から指揮をとったと伝わる。

督戦地からの眺望

眼鏡橋

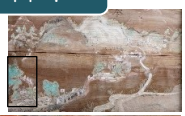
豊岡の眼鏡橋

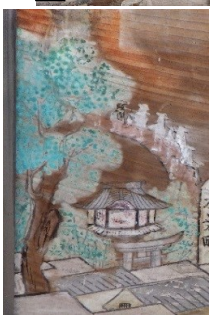
豊岡の眼鏡橋。政府軍の攻撃基点となった。

神木

宇都宮神社と楠の神木。

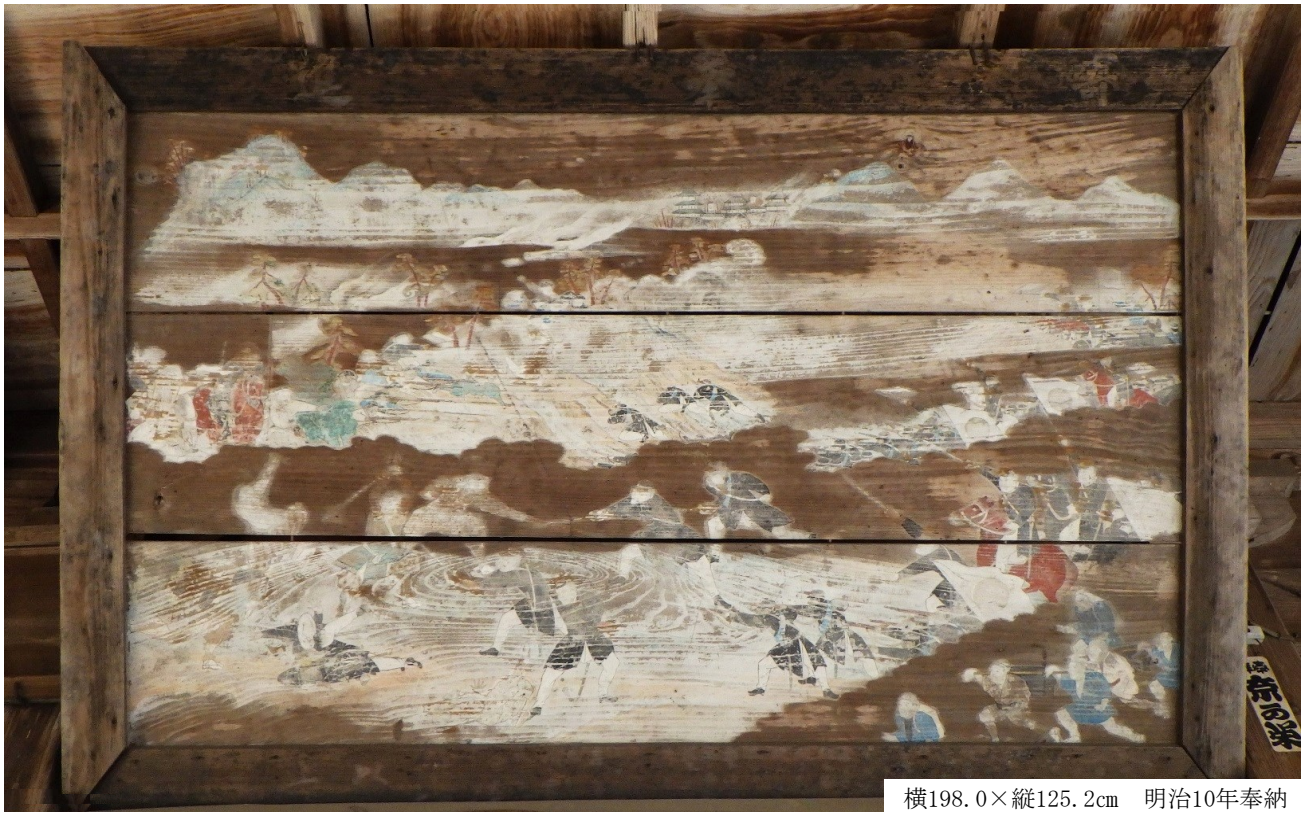
奉納者にとって強い印象があったのであろう。





宇都宮神社の神木

その2　和水町 長小田住吉神社の絵馬



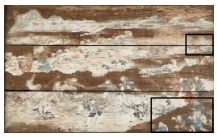
横198.0×縦125.2cm　明治10年奉納

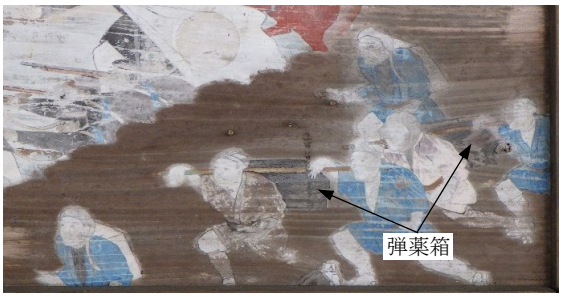
和水町長小田の住吉神社。西南戦争当時、周辺地域からは軍夫として、弾薬・食料の運搬や防塁の築造などに従事した人が多くいた。

この絵馬は、政府軍の軍夫として戦いを目撃したこの地域の人が、その衝撃と戦死した仲間の慰霊の思いから奉納したものと考えられる。

ちなみに、県北部の神社には西南戦争を描いた絵馬が多い。

絵馬の主役





西南戦争時の弾薬箱と砲弾

政府軍の軍夫が2箇所、計9名描かれている。右隅の軍夫たちは、各々の顔が丁寧に描き分けられており、他の兵士等の表現とは明確に異なる。

軍夫個人＝奉納に関わった周辺地域の人の顔を描写したためと考えられる。絵馬の主役は彼ら軍夫といえる。

それは4月8日の出来事？-1

明治10年（1877）4月8日、周辺地域から出仕し、「玉薬配夫」を担った政府軍の軍夫5名が銃弾に当り即死している。
　用木村：3名，滴水にて
　米渡尾村：1名，辺田野にて
　高野村：1名，辺田野にて（滴水から三ノ岳へ弾薬輸送中）

その他、戦争期間中に軍夫2名が戦死している。
　江栗村：1名，7月12日，鹿児島県下にて
　高野村：8月17日，1名，鹿児島県下にて

絵馬には、彼らへの慰霊の思いが込められ、特に5名が戦死した4月8日の模様を描いた可能性が高いといえる。

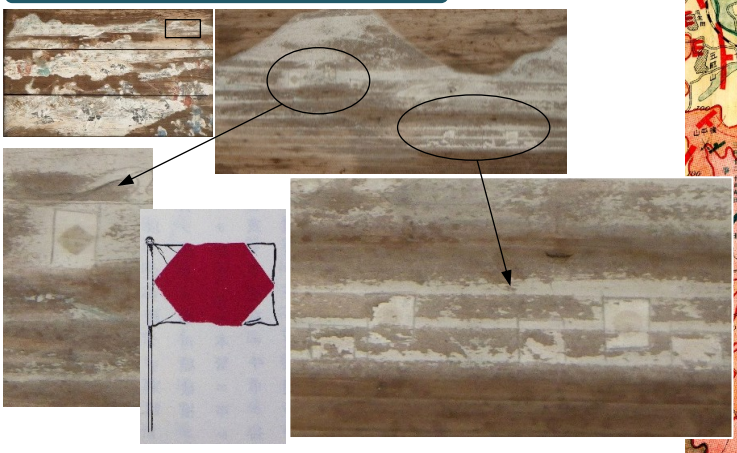
それは4月8日の出来事？-2

水色で示した範囲（白塗り）が朝霧

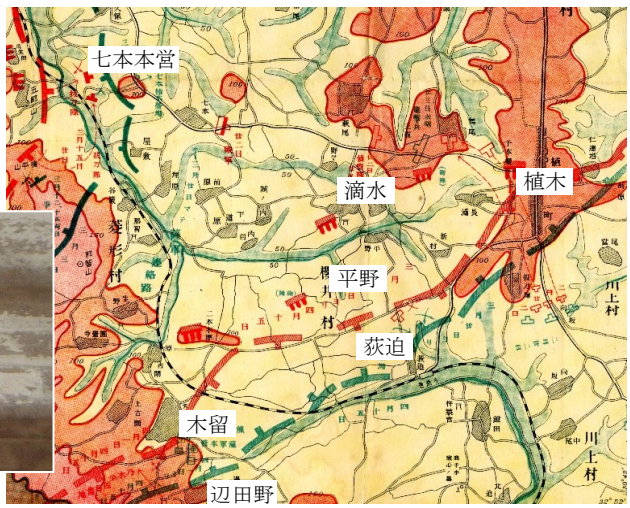
4月8日、滴水・荻迫にて激戦があり、政府軍の弾薬消費量は54万9200発、付近の植木・木留・平野・辺田野を含めた政府軍死者数は84名にのぼった（負傷者249名『征西戦記稿』）。

この日の朝は霧が深く、政府軍はこれに乗じて敵陣に迫っている。
　征西戦記稿「陰霧ノ朦朧タルニ乗シ…敵壘ニ傅ク」
　西南戦争警視隊戦記「滴水の守戦を踰え、冥濛たる陰霧の中を潜進して…」
絵馬には、霧が消えかったなかでの戦闘が描かれており、4月8日の描写としても良いと考えられる。

それは4月8日の出来事？-3



糧食課標章（川口武定1878『従征日記』）



4月8日の戦場、滴水・荻迫方面は、田原坂陥落当日の3月20日から4月15日まで膠着した戦いがくり返されていた。この時点での政府軍本営は、戦場北西の七本にあった。

絵馬の右上（北西側）に日の丸の旗が連立する七本本営とみられる描写があることは、戦場を滴水・荻迫とみた場合、矛盾が無いものである。
近くに菱形印の旗があり、これは3月28日に現地で制定された糧食課標章の可能性が高い。

これらの表現は、実際に見なければ描き得ないものといえる。

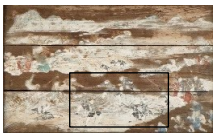
薩摩軍の防壘

薩摩軍の防壘。
低い土堤の上に土俵を積んでおり、西南戦争では良く用いられるものである。

滴水の古写真にも同様の防壘を撮影したものがある。この写真は背後に並木が見られ、この点も絵馬と共通する。

滴水の古写真（戦後間も無い頃に撮影）

政府軍の装備



政府軍兵は、浅黄染めの布に食料等をくるんだ合財袋を斜め掛けに背負っていた。

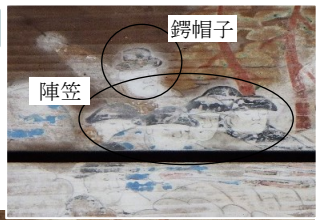
絵馬にも、合財袋を背負った兵卒が描かれている。

川口武定1878『従征日記』

4月8日、政府軍警視隊は防壁を築く工兵の安全確保や薩摩軍の横撃対処などに当たった。

絵馬には、警視抜刀隊の長マンテル（丈の長いコート）や刀吊りが忠実に描かれている。
これらも、実際に見なければ描き得ないものといえる。

薩摩軍の着衣



飫肥隊兵士
小寺鉄之助編1967『西南の役口述書』吉川弘文館

薩摩軍兵の装備は、弾薬・草鞋の他は自弁のため、まちまちであった。
生存者の記述『戦塵録』などには、筒袖、脚絆、羅紗の鍔帽子・陣笠を身に付けていたとある。

絵馬の描写はこれに一致している。

対比資料 ― 錦絵を模写した絵馬

二枚の絵馬ー湯谷天満宮の絵馬・長小田住吉神社の絵馬。
これまで見てきたように、二枚とも、その場にいて体験しなければ描き得なかったものといえる。
通常の絵馬には、このように丁寧で忠実な描写は見られない。
二枚の絵馬を奉納した人の、戦争体験の衝撃と祈りの思いが、それほどに強く、そして表現されたのであろう。

ここに紹介するのは、東京の絵師が新聞報道などをもとに描いた錦絵を模写した絵馬。
錦絵の流行を示すものではあるが、そこには奉納者の「目」を通した描写は見られない。二枚の絵馬の特徴や意義を考えるうえで良好な対比資料といえよう。

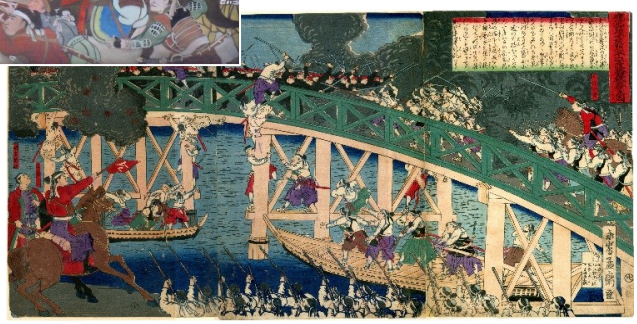
菊池市 水次菅原神社の絵馬

絵馬　奉納日：明治17年8月15日

錦絵「征韓論之圖」
画：楊州周延
届出：明治10年7月5日

福岡県大野城市 平野神社の絵馬

絵馬　奉納日：明治10年9月吉日



錦絵「鹿児島士族熊本安政橋戦争ノ図」
画：永嶌孟斎
届出：明治10年3月
※構図は少し異なるが、明らかに錦絵を模している。

水次菅原神社の絵馬は、明治6年の征韓論政変を描いたもの。
もとになった錦絵は明治10年7月の届出（内務省への出版届）。政変により西郷と大久保が決裂、戦争の遠因となったことから改めて注目され、出版されたと考えられる。

平野神社の絵馬は、熊本城攻防戦のうち、4月8日の突囲隊の戦いを描いたものである。